教育実習指導における附属学校と公立学校との連携

◎櫻井 眞治（東京学芸大学教育実践研究支援センター教育実習指導部門）
〇矢嶋　昭雄（教育実践研究支援センター）　新田　英雄　（附属学校運営部）
〇齊藤　和貴（附属小金井小学校）　岸野　存宏　（附属世田谷小学校）
三大寺敏雄　（附属大泉小学校）　山田　剛史　（附属竹早小学校）
佐川　勝史　（附属竹早小学校）　橋本　和顕　（附属世田谷中学校）
齋藤　祐一　（附属高等学校）
代表者連絡先：sakurai@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】附属学校での指導の重点、公立学校での指導の重点、公立学校のニーズ、教育実習の質の向上

1.　はじめに

文部科学省は、地域の教育委員会との連携、現職教員の研修カリキュラム開発の場などの 「地域のモデル校」として、附属学校を活用することを求めている[(1)]。また、附属学校で蓄積された教員の資質能力の養成システムを公立の教員に活用することへの強い期待も感じられる[(2)]。

本学では、学部3年次に3週間の附属学校における教育実習（基礎実習）、4年次には 3週間の公立学校における教育実習（応用実習）を実施している。このような環境の異なる 2 度の教育実習を積み上げることによって、教育実習生に教育への幅広い視野と、授業実践力を身につけさせようとしている。

2度の教育実習をよりよい場にするためには、文部科学省が期待するように、附属学校において蓄積された教育実習指導の知見を、公立学校の教員にひらくことである。また、それだけではなく、公立学校教員からのニーズをとらえ、附属学校における指導を見直すことである。このような問題意識に基づいて、「教育実習指導における附属学校と公立学校との連携」という本プロジェクトが立ち上げられ、教育実習の質の向上を図ろうと動き出したのである。

2.　本プロジェクトの目的と方法

2.1　目的

公立学校の教育実習指導に関わる問題意識をとらえ、それに応える教育実習指導の知見について発信するとともに、相互の知見を交流することで、附属学校と公立学校の連携上の課題を明確にする。

2.2　方法

(1)附属学校・大学における公立学校実習に向けた指導と、公立学校からのニーズについて、附属学校教員への聞き取り、公立学校管理職、教育実習指導教諭への聞き取り、シンポジウム、公立学校実習後に寄せられる意見・要望等から、明らかにする。

(2)考察にあたっては、附属学校・大学における公立学校実習に向けた指導と、公立学校のニーズとのずれに焦点をあてる。それを受けて、今後の取り組みについての課題を明確にする。

なお、本プロジェクトは、以下のような見通しで進めた。

【１年次】　公立学校の問題意識の把握、先行研究の調査

【2年次】　１年次の成果と課題を受けた研究、研究成果の発信

3.　本プロジェクトの実施

3.1　先行研究に見られる本研究に関わる課題

次山他の「協力学校における教育実習生指導をめぐる諸問題」[3]においては、「授業づくりや言葉遣い等、基礎実習の経験が生きているのか」、「基礎実習での取り組みや成績等を伝えてもらえると、それに応じた指導ができる」という課題や要望が、応用実習校の指導教諭から出されている。また、小林は、基礎実習と応用実習をめぐる課題として「大学における事前・事後指導の充実、関連すべき学部授業との連携不足の解消」、「大学教員の教育実習生指導への協力関与の求めに応えること」を挙げ、「附属・公立学校の関係者と連携しながら、教育実習を含めた教員養成カリキュラム作りを進める」[4]ことを提言している。

3.2　附属学校における実習指導の重点と、応用実習に向けた取り組み

プロジェクトメンバーからの聞き取りやレポートによって、以下のものが表れた。なお、考察に活用するために、1つ1つの意見に①から㊵の通し番号を記すことにした。下線は、筆者による。

(1)基礎実習指導の重点

＜自身の教育観、授業観を見つめさせる＞
①指導教諭の指導の上辺だけを理解するのではなく、「なぜそうするのか？自分はそうしたいのか？」という自身の理想の指導・教師像・教育に立ち返って考えさせる。
②教育実習日誌に、指導教諭からの指導だけではなく、自己の主張、判断、考えを書くように指導する。
③教育は、児童が主役となる営みだと気付かせる。
＜生徒理解と実習生理解＞
④中学校で他教科の授業参観の場も設け、授業毎に変化する生徒の様相をとらえさせる。
⑤教育実習生に、帰りの会でスピーチをさせる。
＜学習指導案づくりと授業実践＞
⑥教材研究と授業づくり
⑦1時間の授業をプランニングできるようにする。
⑧本時の学習指導案、単元案について、チェックする視点を指導する。
⑨学習指導案中の「考える」という記述を「何をどのように考えるのか」と、具体化する。
⑩予想される子どもの反応として、「①その場面で一番してほしい反応」と「②一番されたら困る反応」を書き入れ、②への具体的な対応を留意点に書くように指導する。
⑪部活動と体育実技の違いを明確にした指導の在り方に気づかせる。
⑫「学習指導案をつくることがゴール」という感覚を打破させる。
＜研究協議における気づき＞
⑬「二軸四象限」の表を用いた研究協議[5]を行い、授業研究の面白さを感じさせる。
⑭授業映像によるフィードバックの場面を設定し、自分だけに目が向きがちな教育実習生に対して観察者として授業全体を俯瞰する視点を与える。

(2)応用実習に向けた取り組み

⑮<u>遅刻、提出遅れ、効率のよくない勤務態度に厳しく接する</u>。
⑯<u>言葉遣いに意識を向けさせる</u>。

⑰実習終了時に、長所と課題を明確に伝える。
⑱最後の授業は、一人の力で立案し実施させる。
⑲授業者以外の実習生にも、理科にふれる機会を大切にする。予備実験に多くの実習生が関われるようにしたり、本時の授業に照らして単元構成・実験指導の留意点等を指導したりする。

3.3　公立学校における実習指導の重点と、基礎実習指導や大学へのニーズ

2 度の教育実習シンポジウム[(6)(7)]における公立学校教員の意見と、教育実習協力校から大学に寄せられる意見を整理したところ、以下のものが表れた。

(1)2 度の教育実習研究シンポジウムから

⑳「教師になりたい」という希望をもたせることを重点にしている。
㉑基礎実習とは違う実習体験をさせたい。
㉒基礎実習でどのような授業をし、成果と課題が何であるか。応用実習で取り組みたいことは何であるか等がわかるとよい。
㉓基礎実習の省察に基づいた課題を明確にして臨ませたい。
㉔教育実習の事前と事後も、実習校に継続して関われる場をもてるとよい。
㉕指導教諭が授業のやり直しをしなくても済むように、授業のできる学生を求める。
㉖大学においては、学び続ける姿勢、探究心を培うことを大切にしてほしい。
㉗配慮を要する子どもの実態に応じて、全体指導と個別指導の両立を図る。
㉘教職員と積極的にコミュニケーションを取る。用務主事や給食調理員にも挨拶させている。
㉙１年次から「教職入門」のような教育実習関連科目を行っていることの効果を知りたい。
㉚ 基礎と応用という合計 6 週間の積み上げ方式の教育実習を、他大学の 4 週間 1 回の教育実習と比較した時に、どのような成果と課題があるのかについて、知りたい。

(2)2 度の教育実習を経験した学生の声、大学への要望等

シンポジウムで出された、基礎・応用の 2 度の教育実習を経験した学生の声を、以下に記す。

㉛基礎実習で課題となった、板書構成と子どもの見とりを生かした授業づくりについて、応用実習において意識して実践することができた。
㉜2 つの学級の学級づくりや教室環境を見ることができ、各担任の教育観にふれることができた。
㉝校務分掌の会議、都の研究会、教職員バレーボール大会等への参加もできたので、教員の仕事への視野が広がった。
㉞大学の授業は大人数で行われるものが多いので、学習指導案の作成、模擬授業等において、「自分がやらなければ」という意識の薄い状況が見られる。
㉟基礎実習終了後から応用実習開始までの期間に、基礎実習における自身の成果や課題について仲間と語り合い、それらを明確にする場が必要である。

(3)教育実習協力校からの意見・要望から

応用実習後に、寄せられる各学校からの意見や要望を整理すると、次のものが表れた。

㊱授業実践以上に、「挨拶」、「時間や場面を見て自分から動くこと」、「学校は組織であることの理解と行動」を求めている。

㊲実習期間における大学教員の指導
㊳実習生個人に関わる課題（学習指導案作成、態度等）
㊴実習生の学習履歴の伝達
㊵ボランティア等、人材の派遣

3.4　考察　－附属学校・大学における公立学校実習に向けた指導と、公立学校のニーズとのずれ－

附属学校・大学における指導と、公立学校のニーズとのずれを抽出してみると、以下のものが明らかになってきた。このことは、応用実習を意識した指導として、今後取り組むべき課題である。

(1)基礎実習において、実習生がどのような授業を行い、成果と課題としてどのようなことをとらえているのかを知り、応用実習での指導に生かしたい。実習生自身にも、基礎実習の課題を明確にして臨ませたい。
(2)授業実践以上に、「挨拶」、「時間や場面を見て自分から動くこと」、「学校は組織であることの理解と行動」を求めたい。

(1)のことは、㉒㉓㊴から引き出されるものである。このことによって、㉑の「基礎実習とは違う実習経験をさせたい」ということが可能になる。そこで、このようなニーズを受けて「基礎実習で実施した授業内容、生活指導面の取り組み、それらの成果と課題、応用実習で取り組みたいこと」等をシートに記入し、それを応用実習校に持参し説明することを、事前指導においてこれまで以上に強調している。(2)のことは、⑮⑯㉘㊱から引き出されるものである。基礎実習において、学習指導案の立案と授業実践の指導は、勿論重視していきたいことである。しかし、そのような指導を通じて教育実習生の積極性、自律性を培い、視野を広げていく指導が併せて求められているのである。附属学校とこのような課題を共有し、事前指導においても強調していくことが必要である。

4. 研究の成果と課題

(1)附属学校と公立学校における指導の重点、公立学校のニーズが明らかになった。また、応用実習を意識して附属学校と大学において取り組むべき課題も、明らかになった。
(2) 附属学校における教育実習の評価と課題、公立学校のニーズについて、さらに情報収集を行う。
(3) (1)(2)を受けて、応用実習に向けた取り組みを見直して基礎実習指導を行い、実習生の成長を考察する。そして、基礎実習と応用実習を通した指導プランを作成する。

注 (1) 文部科学省、「国立大学附属学校の新たな活用方策等に関する検討とりまとめ」、2009.3
(2) 文部科学省におけるヒアリング、2012
(3) 次山信男他、第15回東京学芸大学教育実習シンポジウム、1997.2
(4) 小林宏己、「教育実習生から見た附属校実習と公立校実習の差異と発展」、東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　第28集、PP.23-31、2004.3
(5) 岸野存宏、「学び続ける共同体としての学校の創造」、東京学芸大学附属世田谷小学校「藤棚44」、2013、PP.7-14、
(6) 大塚、松澤、長澤他「教育実習における附属学校・大学と公立学校との連携―公立学校のニーズに焦点をあてて―」第31回東京学芸大学教育実習研究シンポジウム、2012.11
(7) 佐川、橋本、黒木、野瀬他「基礎・応用の積み上げ方式が生きる教育実習をめざして」第32回東京学芸大学教育実習研究シンポジウム、2014.1